

谷崎潤一郎と中国

—その中国旅行を通して—

Tanizaki Jun'ichiro and China :

With Regard to his Journey in China

詹 秀 娟

Sen Syuken

I、序

日本の耽美主義を代表する永井荷風と谷崎潤一郎の文学は西欧の影響を受けていると思われる。しかし、谷崎潤一郎の作品の中には多くの中国古典文学が引用されていることが見られる。これは谷崎が漢学について深い造詣を持っていたこともあるが、東洋古典趣味も関係していたのではないかと考えられる。特に「刺青」、「麒麟」などを代表とする初期の作品の中で、中国古典文学を題材にしたものが多く見受けられる。

大正7年と大正15年の中国旅行は谷崎の生涯2度の海外旅行であった。この2回の中国旅行から帰って、いくつかの中国旅行の見聞作品を書き上げたが、昭和以降「蓼喰う虫」あたりから日本古典回帰となってくる。このような問題もあるが、本稿はとくに谷崎の中国旅行を通して、中国古典をいかに谷崎がとらえていたかを考えてみたい。

II、中国古典と関連ある初期作品

谷崎潤一郎の初期の作品の中で中国古典と関連あると思われるのは次の作品である。^(注1)

「誕生」 (明治43年9月号 第二次「新思潮」)

「刺青」 (明治43年11月号 第二次「新思潮」)

「麒麟」 (明治43年12月号 第二次「新思潮」)

「神童」 (大正5年1月号 「中央公論」)

「人魚の嘆き」 (大正6年1月号 「中央公論」)

「玄奘三蔵」 (大正6年4月号 「中央公論」)

「異端者の悲しみ」 (大正6年7月号 「中央公論」)

「誕生」は戯曲であるが、『栄華物語』から取材し、その中で皇子誕生の儀式に『史記』第一巻五帝本紀を引用した一節が見られる。

「刺青」の中で殷の最後の王の暴君紂王の寵妃、末喜（妲己）を描いた絵では、『史記』の殷本紀を用いたと思われる。^(注1)

「麒麟」は谷崎の中国古典文学を題材とした傑作とも言える。この作品は『史記』孔子世家、『論語』、『列子』天瑞篇、『莊子』、『詩經』魏風・葛屨、『春秋左氏伝』、『孟子』の記述に基づいた創作である。^(注2) なお、「麒麟」については、徳田進氏の研究に詳しく述べられている。^(注3)

「神童」、この作品は谷崎自身がそのモデルとなっていると思われる。^(注4)

谷崎の同窓の辰野隆氏の「旧友潤一郎」^(注5)によると、明治34年10月、16歳の谷崎が東京府立第一中学校の「学友会雑誌」第35号に「牧童」と題する次の漢詩を寄稿した。

「牧笛聲中春日斜。青山一半入紅霞。行人借問歸何處。笑指梅花溪上家。」

当時習字の先生であり漢詩人でもあった岩佐眉山から「語調寛間、有景有情」という評をもらっているという。^(注5) この詩のモチーフは杜牧の「清明」の

「清明時節雨紛紛 路上行人欲斷魂 借問酒家何處有 牧童遙指杏花村」

に近いものであるとうかがわれる。^(注1)

辰野隆氏によると、谷崎は更に明治34年12月、同じく「学友会雑誌」第36号には「護良親王」「観月」「残菊」の3首の漢詩と作文「歳末の感」を寄稿した。

その3首の漢詩は次のようである。

「護良王」

「鹿走三山運竟空。南朝往事泣英雄。天闍未掃妖雲影。賊子屠龍土窟中。」

「観月」

「薄暮東山待月來。卷簾間倚小樓臺。忽看林杪清輝閃。娥影先浮潑灑杯。」

「残菊」

「十月江南霜露稠。書窗呼夢雁聲流。西風此夜無情甚。吹破東籬一半秋。」

^(注6)

「残菊」の詩に岩佐眉山は「愛黃花之節。傷其凋零。自是陶家遺意。」と評し、この詩には陶淵明の遺風が漂っていると評しているというのである。^(注5)

「神童」の主人公春之助が詠んだ詩では

「牧笛聲中春日斜。青山一半入紅霞。借問兒童歸何處。笑指梅花溪上家。」

ここでは谷崎が再び漢詩「牧童」の「行人借問」の部分が「借問兒童」に改められていることが見られる。^(註1) 谷崎が若い時から、すでに唐詩選に興味を持っていたことがうかがわれる。

「人魚の嘆き」は愛親覚羅氏の清朝の王宮を舞台にして記したものである。

「玄奘三蔵」をテーマにした三蔵法師の逸話の作品である。

「異端者の悲しみ」の中では下のように記している。

「入浴の快感を歌つた有名な唐詩の文句、「温泉水滑洗凝脂。」と云ふ長恨歌の一節が、古い古い記憶の底から呼び醒された。さうして長恨歌から必然的に、白樂天の聯想が彼の頭に現れ來たのである。」

また、「自分勝手な章三郎は、古い諺にある「人の將に死なんとする時、其の言や善し。」という『論語』の「鳥之將死、其鳴也哀。人之將死、其言也善。」を引用している。^(註1)

以上の例に見られるように谷崎は初期の作品において、中国古典の素養の深かったことがうかがわれる。

Ⅲ、谷崎における漢学の素養

明治25年9月第2学期に谷崎潤一郎は日本橋区阪本小学校に入学した。当時の担任は稲葉清吉訓導であった。谷崎の晩年の自叙伝「幼少時代」(昭和30年4月号～昭和31年3月号「文芸春秋」)によると、谷崎は小学校へ上がっても、ばあやが附いて行かないと登校しない泣き虫坊であった。1年生の時には稲葉先生に落第させられた。この稲葉先生は潤一郎が高等1年になった時、再び担任となり潤一郎の卒業まで4年間指導を受け持った。「幼少時代」の中で谷崎は次のように述べている。

「稲葉清吉氏は後年私に非常に深い感化を及ぼした先生で、多分私の全生涯を通じ、凡そ師と名づくべき人々のうちで此の人以上に私に強い影響を與へ

た先生はないのである。」

谷崎によると、稲葉清吉先生はお茶の水の師範学校出で、中国の古い聖賢の書、仏教——主として禅・哲学の書を始めとして、平安朝から徳川時代に至る和歌や軟文学の書にまで及んだ博学の先生であった。その思想は陽明学派の儒学と禅学、それに唯心哲学であった。漢文の素養は一般に今より程度の高かった当時としても、普通の小学校の教師よりは水準が上であった。浜本浩氏は「大谷崎の生立記」^(註7)の中で稲葉先生について、次のように述べている。

「稲葉訓導は東京府師範学校出身の正教員で、その頃三十歳前の独身だった。漢学が得意で授業の間には面白い話をして聞かすので生徒の受けもよかった。高等1年生に程朱学、陽明学の根本解義を試みたり、仏教の教理を解いたりしたので、天才児童の谷崎さんは忽ち啓発されて、(中略)そればかりではなく、稲葉訓導は、十一、二歳の少年達に科外授業として四書五経、近古史談などを講義してきかせ、抜き書きを謄写版刷にして「光風霽月」と題して、生徒達に配ったりした。」

これまでも言われているが、谷崎は稲葉先生の薫陶を受けて、漢学の基礎を築いたと考えられる。

谷崎の漢学素養を啓発したのは稲葉清吉先生のほかにもう一人野川闇栄先生がいた。谷崎は1年生の時落第して担任は野川先生に変わった。野川先生から当時博文館で発行していた「少年文学」という叢書の中の巖谷漣山人の「こがね丸」、川上眉山の「寶の山」、村井弦斎の「近江聖人」、高橋太華の「新太郎少将」などの話を聞かされた。そのほかに漢楚軍談の鴻門の会の話、項羽が垓下で四面楚歌の状況に置かれ、虞美人に別れを告げる話なども聞いた。明治31年漣山人の「新八犬伝」が「少年世界」に連載され、次いで河山人の「乞食王子」、依田学海の「豊臣太閤」もこの雑誌に長い間連載されていたもので、谷崎が歴史物に興味を抱くようになったのは、この作品あたりが始めであったと「幼少時代」に述べている。

また、「親不孝の思ひ出」には、野川先生から『史記』五帝本紀における舜帝の話の聞いた一節が述べられている。

「尋常科時代の私の級を受け持つてゐたのは岡山縣生れの野川闇榮と云ふ先生であつたが、いつも修身の時間になると、私はこの先生から支那や日本の古い孝行息子の物語を數限りなく聽かされたことを思ひ出す。私は文天祥や楠正成のやうな忠臣の物語にはそれほど動かされなかつたが、孝子の話は親と云ふ對象が身近にあるので、それだけ切實に感じたし、先生の方もひとしほ身を入れて説いていたやうに思ふ。

おぼろげな記憶を辿つて行くと、最も古いところでは、尋常一年か二年の折りに聞いた支那の聖人の舜の話がある。舜は大昔の五帝の時代の帝王であるが、生れながらの天子であつた譯ではない。

(中略)

當時の小學校の先生は大概史記や十八史略ぐらゐは讀んでゐたので、野川先生は多分さう云ふ書物に基づいてこの話をしてくれたのであらう。

(中略)

先生の話には史記や十八史略にも書かれてゐない、お伽噺のやうな話も出て來たのであるが、あれは先生が子供を喜ばせようとして、自分で拵へたのであらうか、或は何か出典があつたのであらうか。舜が横穴を掘つて首尾よく逃げるところなどは、幼童の頃手に汗を握りながら聞いた。」

谷崎は少年時代からすでに野川先生から中国古典の歴史物語についてよく聞かされたと思われる。作品のなかで中国古典を題材にした創作小説やよく歴史物を小説にしたものは野川先生の影響をうけていると考えられる。

谷崎は野川先生のあと、高等科の頃、稲葉先生から矢野龍溪の「経国美談」や「浮城物語」を聞き、先生の薫陶で大塩中斎の「洗心洞割記」を読み、大槻盤溪の近古史談、和漢の詩集の類を不規則ながら学んだ。そのほかに阪本小学校を卒業する一、二年前からサンマー塾で英語を、秋香塾で漢学を勉強した。秋香塾では貫輪五郎という先生から『大学』、『中庸』、『論語』、『孟子』、『十八史略』、『文章規範』などを素読によって教えられた。『十八史略』などの難しい文字を母に尋ねると大抵教えてくれたというのである。

稲葉先生は谷崎の才能を認め、将来にすべての望みをかけ、力を注いでいた

ようである。しかし、谷崎は「幼少時代」の中でこのように述べている。

「先生には文學趣味もあつたけれども、眞に志すところは古への聖賢の道で、私を儒教的に、もしくは佛教的に育成することを念としたらしいので、しまひには私に失望する結果となつた。私は次第に、自分の哲學や倫理宗教に対する興味は、要するに一時の附け焼刃で、先生からの借り物であるに過ぎず、自分の本領は純文學にあることを悟るやうになるにつれて、いつからともなく先生と離れてしまつた。」

そこで、後に谷崎は稲葉先生と違って「文学」、特に「純文学」の方向へ進んだのであろう。

IV、谷崎潤一郎の中国旅行

大正4年三十歳の谷崎潤一郎は石川千代（のちに佐藤春太夫人となった）と結婚し、翌年長女鮎子が生まれたが、翌6年には母を失った。大正7年に一人で初めての中国旅行をした。谷崎の中国旅行は少年時代から親しんだ中国古典を通しての中国への憧れからで、自らその生活と風物にふれたかったのであろう。また、当時の身の生活の気分転換のためでもあったと思われる。その当時の谷崎は、私生活では妻子を蠣殻町の父の家に預けっぱなしで、千代夫人の妹せい子と半同棲生活が始まっていたのであった。このせい子は谷崎の『痴人の愛』（大正13年）のナオミのモデルと言われている。^(註8) 更に大正7年は第一次世界大戦が終結し、ヨーロッパが比較的平穏になりはじめた年で、この中国旅行は西欧へ「洋行」の小手調べとも言われている。^(註9) しかしながら、生涯における海外旅行は中国旅行へ2回行っただけであった。

中国旅行については、谷崎の「支那旅行」（大正8年2月号「雄弁」）によると、大正7年10月9日に東京を出発して朝鮮へ渡り、朝鮮から満州を経て北京に着いた。北京からは汽車で漢口へ行き、そこから揚子江を船で下り、九江に寄って廬山を往復し、さらに南京、蘇州、上海、杭州とまわり、再び上海に

戻って、船で帰国した。マル2ヶ月を費やす旅であった。朝鮮では、一高時代の友人岸巖の世話になり、谷崎の「奉天時代の杵太郎氏」(昭和21年10月号「藝林閒歩」)の追憶記によると、満州では奉天の南満医学堂に奉職していた木下杵太郎の家に10日ほど泊めてもらったという。上海では一中時代からの友人、三井銀行の土屋計左右の借りていた部屋に同宿させてもらった。この旅行で谷崎は自らの目で中国の生活風物を見ることができ、夜の町の探険もしていたようであった。^(注9) 谷崎は中国から帰った後、中国旅行を題材にしたいいくつかの見聞録、紀行文や小説などを発表した。

大正8年「美食倶楽部」 (1月～2月 「大阪朝日新聞」)

感想「蘇州紀行前書」 (2月号 「中央公論」)

感想「支那旅行」 (2月号 「雄弁」)

口絵写真説明「南京夫子廟」 (2月号 「中央文学」)

紀行「秦淮の夜」 (2月号「中外」、3月号「新小説」続稿原題「南京奇望街」)

紀行「蘇州紀行」 (2月号、3月号「中央公論」、原題「畫舫記」)

「西湖の月」 (6月号「改造」、原題「青磁色の女」)

随筆「支那劇を見る記」 (6月号 「中央公論」)

随筆「支那の料理」 (10月号 「大阪朝日新聞」)

「天鵝絨の夢」 (11月～12月 「大阪朝日新聞」)

大正9年戯曲「蘇東坡——或は「湖上の詩人」——」 (8月号「改造」)

大正10年日記「廬山日記」 (9月号「中央公論」原題「廬山日誌」)

大正11年随筆「支那趣味と云ふこと」 (1月号「中央公論」)

なお、二回目の中国旅行では、次の作品を書き上げた。

随筆「上海見聞録」 (大正15年5月号 「文芸春秋」)

随筆「上海交遊記」 (大正15年5月号～6月号、8月号「女性」 原題「上海交游記」)

上に挙げた「秦淮の夜」は谷崎が中国での実体験に基づいて、一般庶民の生活の様子や夜の南京奇望街の妓館の探険を面白く描いた。

「蘇州紀行」では、＜畫舫＞すなわち遊宴の際に乗る、美しく装飾した船の行き交う水郷情趣が中国古典を連想させて描かれている。例えば畫舫の時に船の柱に「一簾波影」「四壁華香」と記した一對の聯があり、また、途中の沿岸に「兩岸桑麻盈緑野」「一溪煙雨帶春山」と刻してある第一鼓橋や「兩岸桃花迎曉日」「一渠春水漾恩波」と刻してある第二鼓橋が谷崎にはすぐ目についた。船が靈巖山が見えてくるところまでくると、昔、館娃宮という宮殿があって、中国古代の美人西施がそこに住んでいたという伝説を想起した。そして、

館娃宮中麋鹿遊　西施去泛五湖舟

という『剪燈新話』の「聯芳樓記」の中にある蘇台竹枝曲の文句を思い出した。

「西施と云へば、歴史上の人物の名であるよりも、私には何だかお伽噺に出て来るお姫様の名のやうな気がする。お伽噺のお姫様としてより外に、私は西施の事蹟を知らない。其のお姫様の故郷がつい眼の前にあるのかと思ふと、日本歴史の古蹟を訪ねる場合とは違つて、非常に遠い夢のやうに遙かであつたものが、急に近くへやつて来たやうに感ぜられる。ほんたうに不思議な氣持がする。」

という一節が述べられている。

更に、畫舫の時、船から蘇州城の虎丘の塔が見えてくると再び蘭英蕙英姉妹が詠んだ蘇台竹枝曲の一節も思い出していた。

虎丘山上塔層層　夜靜分明見佛燈

約伴燒香寺中去　自將釵釧施山僧

「此の詩を詠じた蘭英蕙英の姉妹の家は、恰も此の運河の川つゞきなる城外の西廓門のほとりにあつた筈であるから、「虎丘山上塔層層」と云ひ、「夜靜分明見佛燈」と云つたのは、蓋し實際の叙景であらう。」と述べ、谷崎は目の前の実景が此の詩と一致していることに感動した。

更に、文末に次のような「聯芳樓記」の蘇台竹枝曲の第1、4、5、7、9首^(註10)をあげて文を結んだ。

姑蘇臺上月團團 姑蘇臺下水潺潺
月落西邊有時出 水流東去幾時還

門泊東吳萬里船 烏啼月落水如烟
寒山寺裏鐘聲早 漁火江楓惱客眠

洞庭金柑三寸黃 笠澤銀魚一尺長
東南佳味人知少 玉食無由進尚方

楊柳青青楊柳黃 青黃變色過年光
妾似柳絲易憔悴 郎如柳絮太顛狂

一綯鳳髻綠於雲 八字牙梳白似銀
斜倚朱欄翹首立 往來多少斷腸人 (聯芳樓記)

また、中国の旅を題材にした小説「西湖の月」では、高青邱の詩を引用して、南国風情があふれる杭州の西湖の景色を描いた。

渡水復渡水 看花還看花
春風江上路 不覺到君家

ここには中国の自然の静かな風景がよく描写されている。谷崎はこれらが大変好きだったのであろう。

更に、西湖で自殺して一命を断った小説の主人公麗小姐のことから、同じこの湖でなくなった六朝の名妓蘇小小のことを思い出した。蘇の墓にある慕才亭の四本の石の柱に刻まれている薄命の佳人を悼む詩の文句を文末にあげている。

金粉六朝香車何在
才華一代青塚猶存 (葉赫題)

千載芳名留古蹟
六朝韻事著西冷

湖山此地曾埋玉
花月其人可鑄金 (皮淋集)

桃花流水杳然去
油碧香車不再逢 (徐蘭修)

花鬢柳眼渾無賴
落絮遊絲亦有情 (孔惠集句)

燈火珠簾儘有佳人居北里
笙歌畫舫獨教芳塚占西冷 (平湖王成瑞)

以上述べてきたように、谷崎は中国旅行で見た実際の中国は実に静的情景に溢れるものであり、そのことは谷崎により一層中国古典を身近なものとして感じさせるものであった。谷崎は心の中に潜んでいた中国古典が故郷に帰ったような感銘をうけたのであろう。

それに、谷崎は少年時代からすでに漢詩に深い関心を持ち、また唐詩にも大変愛着があった。特に李白、杜甫、杜牧などの唐詩を愛読していたようである。作品の中にしばしば中国の詩が登場していることにもそれは見受けられる。谷崎は「支那旅行」に南京、蘇州、上海が気に入ったと述べている。たぶん、谷崎は憧れていた中国古典の風情が中国の江南にあり、その詩の境界を自ら体験できたことによるものであろう。

こうして、帰国後、中国の自然に対する感動を「鮫人」(大正9年「中央公論」1、3、4、5、8、9、10月号、未完中止)の中で次のように述べている。

「(前略) まるでお伽噺にでもあるやうな楽しい国土、——かう云ふ國土に生れたら、自分はどんなに仕合せだつたらう。明け暮れ此の莊嚴な景色の中に育てられたら、「自然」に對する自分の感覺はどんなに早く眼を開いたとら

う。自分の藝術はどんなに此の自然から深い秘密を汲み取ることが出来たべらう。——南はその時さう思はずに居られなかつた。自分のやうに支那思想に傾倒する人間が支那に生れなかつたのは、取り返しのつかない不運だと云ふ氣がした。さうして彼は今、服部の口から吐き出される葉巻の匂ひを嗅ぎながら、再び其の不運に就いてしみじみと考へることを餘儀なくされた。自分は既に支那から歸つて來た。日本の過去の文明の親であり淵源であつた彼の貴い大陸に別れて、自分は永久に日本人として此處に斯うして居る。自分の眼の前にはあの幽邃で冥想的な北京の代りに淺薄で醜惡な東京がある。此の二つの都會の相違はアラビアン・ナイトを讀んだあとで講談本を讀むほどの相違ではないか。自分は結局東洋人であるから、藝術に於いても東洋主義を離れたくない。然るに自分の生れた此の今の日本では、西洋主義——それも半熟の西洋主義に崇られつゝある今の日本では、自分が其處に美を見出さうとする純朴な自然が到るところで破壊されて居る。もともと支那に比べれば小規模で貧弱な此の國の自然のうちで、倪雲林の山水や王摩詰の詩境を何處に求めたらいいであらう。」

(中略)

「僕は支那だ、どうしても支那でなけりや駄目だ。來年にでもなつたら親父に頼んで、もう一度支那へ行かして貰はうかと思つて居る。尤も君の淺草と一緒にされちや少し困るがね。」

(中略)

「僕は昔から君と違つて、『人間』よりも『自然』の方に憧れる性質を持つて居る、『自然』の裡に自己の藝術を見出さうと努めて居る。さう云ふ僕があの大雄大な支那の自然——洞庭湖や揚子江の景色を眺めながら、東洋藝術の理想を説かれたのだから、實際酔はされてしまつたのだ。」

と述べている。

上に挙げた「鮫人」にも見られるように、谷崎は1回目の中国旅行から歸ると、中国の持つ自然の魅力に引かれ、中国が好きになり、もう一度中国へ行こうとずっと考えていたようである。『痴人の愛』(大正13年3月～6月「大阪朝

日新聞」・掲載中断・大正13年11月～14年7月）を雑誌「女性」に連載完結した後、上海の旅を計画した。前回の中国旅行でも世話になった上海の三井銀行支店の土屋計左右に、将来、上海と日本の両方に家を置き、行き来しようという考えを伝えた。大正15年1月13日に長崎から船で単身上海へ立ち、2月19日まで上海に滞在した。

今回の上海旅行について、「上海交遊記」にも述べているように内山書店の内山完造を通じて、中国の若い作家連中、田漢、郭沫若、歐陽予倩、周作人らと知り合いになり、交遊を深めたという。この作家たちとの交際は戦後までつづいた。今度は上海一流のホテル一品香に泊まったという。こうして、上海から帰国すると「支那趣味」が一層強くなり、中国風模様の家具や調度品が多く取り揃えるようになる中国趣味の生活をするのである。^(注11)

しかし、一方では変貌する上海に失望している。「上海見聞録」では、

「一方支那人の風俗なぞも、悪く西洋かぶれがして、八年前に來た時とは大分違つた印象を受けた。氣に入つたならば上海へ一戸を構へてもいいくらゐに思つてゐた私は、大いに失望して歸つた。西洋を知るには矢張り西洋へ行かなければ駄目、支那を知るには北京へ行かなければ駄目である。」

と述べている。

ここで二回目の上海旅行では、千葉俊二氏も指摘しているように谷崎は文化の独自性に対する認識をもって帰国したというのである。^(注12)

V、結語

以上、述べてきたように谷崎の中国古典に対する知識は幼少からの環境により会得したもので、それは谷崎が素養として、身につけたものと思われる。中国古典は谷崎文学を築いた下地であり、谷崎文学の中に重要な位置を占めていると思う。

谷崎は中国古典への憧れから中国旅行に行き、実際の中国を見てきたのであ

る。そして、帰国後、中国旅行の感動を漢学の素養を生かす形で「秦淮の夜」、「蘇州紀行」、「西湖の月」などにみられるように中国古典を取り入れた作品を発表した。その旅行の際、中国の自然や生活、風物に深い感動をうけた。そこから派生した中国趣味を谷崎は「支那趣味と云ふこと」の中で次のように述べている。

「私は斯くの如き魅力を持つ支那趣味に對して、故郷の山河を望むやうな不思議なあこがれを感じると共に、一種の恐れを抱いて居る。なぜなら、餘人は知らないが私の場合には、その魅力は私の藝術上の勇猛心を銷磨させ、創作的熱情を麻痺させるやうな気がするから。——此の事は他日委しく書く時であらうが、支那傳來の思想や藝術の眞髓は、靜的であつて動的でない、それが私には善くない事のやうに思へる。——私は、自分が、特に誘惑を感じただけ、尚更恐れて居るのである。私も子供の時には漢學の塾へ通つたし、母は私に十八史略を教へたものであつた。此の頃の中學校などで無味乾燥な東洋史の教科書を教へるよりも、あの面白い教訓と逸話に富む漢籍の方が、どんなに子供の爲めになるか知れないと、今でも私はさう思ふのである。そして其の後、一度は支那へも遊びに行つて來た。私は支那を恐れながらも、私の書棚には支那に關する書籍が殖えて行くばかりである。止さう止さうと思ひながら、私は時々二十年も前に愛讀した李白と杜甫を開いて見る。

「あゝ、李白と杜甫！ 何と云ふ偉大な詩人だろう！ 沙翁でもダンテでも果たして彼等よりえらかつたらうか？」と讀む度毎に私はその詩の美に打たれる。横濱へ移轉して來て、活動寫眞の仕事をし、西洋人臭い街に住まひ、西洋館に住んで居ながらも、私のデスクの左右にある書棚の上には、亞米利加の活動雜誌と共に高青邱や吳梅村が載つて居る。私は仕事や創作の爲めに心身が疲れた時、屢々それらの雜誌や支那人の詩集を手にとつて見る。

(中略)

——今のところでは、成るだけ支那趣味に反抗しつつ、やはり時々親の顔を見たいやうな心持で、こつそりと其處へ歸つて行くと云ふやうな事を繰り返してゐる」。

谷崎は中国旅行に行く前から西洋を崇拝していた。中国から帰ると「鮫人」に見られるように西洋と東洋との間での葛藤がますます強くなってきた。中国旅行でその中国の持つ自然の魅力に引かれ、心の中に潜んでいた中国古典への憧れがますますつのると共に、中国趣味の傾向が一段と強くなった。また、この頃の谷崎は中国旅行をきっかけに、西洋崇拝の夢から醒めて、ノスタルジア（郷愁）を感じ、東洋古典趣味へと傾倒していきはじめている。しかし、大正15年の上海旅行以後は、中国を題材にした作品が少なくなり、特に昭和以降「蓼喰う虫」あたりから、谷崎の作品が中国古典趣味から日本古典の伝統美を生かした形での日本古典回帰の方向に向かっていくように見受けられる。また、大正12年の関東大震災をきっかけに関西に移住したこともあって、関西で谷崎は中国の古都に中国古典文化を発見してきた目で、忘れていた平安朝の文学を再発見し、上海旅行から帰ると東洋における日本伝統文化の独自性を作り出したのではないかと思われる。

注釈

- (注1) 原田親貞 「中国文学と谷崎潤一郎（一）」 「学苑」第348号 昭和43年12月
- (注2) 吉田精一 『谷崎潤一郎』 近代文学鑑賞講座 第9巻 角川書店 昭和34年10月
- (注3) 徳田進 「谷崎文学と中国古典との交渉―「麒麟」を中心に―」 『近代文学の新研究（三）』所収 文教社 昭和43年6月
- (注4) 橋本芳一郎 『谷崎潤一郎の文学』 増訂版 近代の文学・8 桜楓社 昭和42年7月
- (注5) 辰野隆 「旧友潤一郎」 文芸読本『谷崎潤一郎』所収 河出書房新社 昭和52年2月
- (注6) 『谷崎潤一郎全集』 第24巻「学友会雑誌」 中央公論社 なお全

集によると「護良王」と題している。

- (注7) 浜本浩 「大谷崎の生立記」 「文芸」昭和9年7月 (注2) 吉田精一『谷崎潤一郎』所収
- (注8) 和田芳恵 「『痴人の愛』のナオミ」 「婦人朝日」 昭和32年10月
- (注9) 野村尚吾 『伝記谷崎潤一郎』 六興出版 昭和47年5月
- (注10) 同(注1) 参照
- (注11) 谷崎松子 「倚松庵の夢」 中央公論社 昭和42年7月
- (注12) 千葉俊二 「谷崎潤一郎の人と作品」 「鑑賞日本現代文学」 8
『谷崎潤一郎』所収 角川書店 昭和57年12月30日
- (注13) 本文引用『谷崎潤一郎全集』愛読愛蔵版全30巻による 昭和56年5月15日～昭和58年5月15日 中央公論社